



「アース王子」の 絵本ができました

HEADLINE

- 通常総会で仮認定NPOの報告をします
- 「認定NPO」と環境の取り組み
- 自主事業「アイーナ夜学」便り(その2)
- イベント報告、今後の予定

平成26年 5月31日 発行

本号の内容

代表理事挨拶	1
認定NPOについて	2
アイーナ夜学便り	3
イベント報告・案内	4

会員数	合計	132
	個人	90
	市民団体	15
	事業者	20
	行政機関	7

環境省事業を実施しました(滝沢市もとむら保育園で活躍した「アース王子」H26.2.12)

環境パートナーシップいわて 認定NPO特集 ニュースレター 第22号

6月22日の通常総会へご参集をお願いします

野澤代表理事から

新たな事務局長に櫻井副代表を迎えた新体制が発足して2か月が経過しました。本年度受託事業の計画書や提案書作成、仮認定NPOの申請・認定書受領などと共に継続の活動も本格化する中で、着々と伸展しています。新たなスタッフに斎藤富美子さん、シニアアドバイザー(対外呼称)として岡村治さんを迎えて、より充実した活動にステップアップを図っています。

折しも、来月6月は環境基本法によって国が定めた「環境月間」・6月5日は「環境の日」と定められています。1972年6月5日にストックホルムで、「かけがえのない地球」をキャッチフレーズに開催された「国連人間環境会議」で、日本の提案により国連はこの日を「世界環境デー」と決めました。環境の日とこの日を含む環境月間は、県民・事業者問わず広く環境の保全について関心を持ち、ともに考え理解を

深めると共に、積極的に身の回りの出来る事から環境保全に関する活動に参画して頂きたいと願っています。

当会としても広く県民に意識して頂くために、6月5日の環境の日に、13時30分より県の貸与車両「エコカーゴ」の排出CO₂をカーボンオフセットする証明書授与式をアイーナ3階屋外広場において、県当局の立会の下に授与者三田農林三田林太郎社長により行います。

また、この環境月間に開催される定時総会と付帯の講演会には、愛・地球博をプロデュースして成功に導き国際的にもご活躍の環境システム研究所原田鎮郎代表にお出で頂きます。

是非多くの皆さまお誘い合わせでご参加くださいます様にお願い致します。

◆ 第11回通常総会 6月22日(日) 13:00~ サンセール盛岡(盛岡市志家町1-10)
講演会 原田鎮郎氏「愛・地球博から岩手の未来へ〜総合環境力による共生まちづくり〜」

「仮認定NPO法人」になりました

■ 仮認定NPO法人としての認可を受けました

3月6日、仮認定NPO法人を取得するため申請書一式を県庁に提出しました。その後は県庁担当課による申請書のチェック、不要な部分の削除と必要事項の追加、修正などを行いました。法人の運営状況確認のため4月21日には、県庁環境生活部若者女性協働推進室認定NPO法人専門員伊藤則生氏他2名の職員が来訪しました。経理状況のチェック、実施事業の内容などの確認と運営実態の詳細な聴取を受けました。これら一連の審査を経て、5月19日環境パートナーシップいわては、仮認定NPO法人としての認可を受けました。5月20日には野澤日出夫代表理事が県庁に赴き、若者女性協働推進室鈴木浩之室長より、認定書が授与されました。

■ 仮認定後の活動

仮認定NPO法人として社会的認知度を高め、環境保全、環境学習、温暖化防止などに鋭意取り組んでいきます。最終的には岩手の環境をより良いものとし未来世代に渡すための活動です。このために意義ある自主事業を行い、賛同される多くの方々から寄付を募りたいと考えています。仮認定NPO法人への寄付は税控除の対象になるため、

仮認定取得に「より寄付しやすい環境が整いました。寄付を集めるために、環境パートナーシップいわては社会のニーズに合致した有意な事業を展開していきます。皆様の一層のご支援をよろしく願いいたします。(櫻井)



なぜ、認定NPO？

1. 「環ぱい」の活動分析と運営課題

環ぱいは認定NPOにむけて平成26年に仮認定申請を行い、認定されました。この認定に至る経緯を説明します。昨年、10周年記念事業を実施しましたが、準備に約2年の歳月を費やしました。それは、これまでの10年の振り返りと今後10年の運営課題を分析するためでした。その分析や課題は、以下の3点にまとめることができます。

- 1) 発足以降の4つの時期と活動分析
- 2) 東日本大震災と復興支援課題の登場と対応意義の確認
- 3) マネジメント体制構築と10年後の発展方向の提案

この3つの課題の解決方法のひとつとして認定NPOがある、とご理解いただければと思います。以下、この3点について説明します。

2. 4つの取り組み時期における活動の特徴分析

10周年記念誌に図1の経緯を示しましたが、環ぱいはこの4つの時期に、特徴的な活動を行ってきたと振り返っています。まず発足期には、既に環境活動に取り組んでいた会員の提案が活発に行われていました。提案された方の思いを、環ぱいは、学習会、講演会、広報活動などで取り組んでいました。この時期は、会員の熱心な思いを背景に、ボランティア的に取り組む活動が目立ちました。

次に、NPO期が登場しました。NPO期は、事業内容や成果目標を委託者が設定し、その設定の条件下で、環ぱいとしてマネジメントしていくスキルが求められていました。すなわち、事業目標をきちんと達成できる専門性を持つスタッフの雇用、人材育成、また事業経費の管理業務や執行指導等が発生しました。当時の役員、また会員の皆様のご支援で、この受託事業がきちんと運営されてきました。改めて感謝を申し上げます。

しかしNPO期の運営は、広く支持されたわけではありませんでした。環境問題に熱心な思いを持つ会員から、発足時に抱いた活動の取り組みを行うよう、要望がでていました。これが再構築期の特徴です。具体的な対策として、限られた会員会費の枠内で、環ぱいのブランドを強化する自主事業の模索が行われました。これも大変な苦労を重ね、会費以外からも寄付を募り、継続してきました。

そして東日本大震災が発生しました。4番目となる復興支援期の特徴は、待たなしの環境課題が登場したことです。環ぱいは既存の受託事業や自主事業を抱えながらも、想定していなかった復興に関する連携活動や突発的な事業の実施に踏み切ることになりました。東日本大震災は結果的に、環ぱいに対し、目的達成型の迅速な企画運営や広域連携活動に向かわせることになりました。

3. 復興支援期の活動の特徴と対応の意義

被災地域のニーズは緊急かつ多様でした。当初は手弁当でしたが、その後、補助事業等も活用し、支援関係の会議に参加し、復興計画等の支援も行いました。これらの活動は、再構築期に市民提案プロジェクトで募集していた自主事業に匹敵します。復興支援の課題は今日も次々に発生し、その都度、役員の判断で取り組んできました。その結果、環ぱいは、地域ニーズに対する迅速な企画力と従来事業との調停を行うコーディネートのスキルを高めてきたのです。これが復興支援期の特徴でした。事業支援の一例として、図2にPV-Net(太陽光発電所ネットワーク、都筑 建代表)との連携事業による野田村のソーラーパネル設置と、地域ビジネス発足支援の実施例を示します。その他、学習教材支援、緑のカーテン事業、着物リサイクル活動等を精力的に展開していました。



図1 環ぱいの4つの活動時期と特徴



図2 野田村市民共同発電所の点灯式 H25.6.8

復興支援期の活動はそれまでの環ぱいの自主事業とは性格が異なるものでした。ステークホルダーと呼ぶ階層から、直接、要望が寄せられ、迅速な状況理解と事業企画や管理を行うことが求められたのです。また、復興支援の事業は数年単位のものではなく、10年続く可能性もあります。このため環ぱいの今後の運営では、復興支援期で学んだ運営ノウハウの延長上にあると考え、今後10年の活動目標の筆頭に掲げたのでした。

4. 認定NPOと10年後の発展方向の提案

認定NPOは、以上の4期の分析と今後10年の見通しのもとで出てきた取り組みのひとつです。認定NPO化による寄付金は、従来の自主的な環境活動はもちろん、急を要する復興支援等に活かすものです。今後も、被災地のニーズ等に沿った迅速かつ効果的な自主事業に取り組む機会が多いと考えます。この自主事業の内容は前回のニュースレターで紹介しましたが、4つの目標、(1)震災復興支援、(2)環境を考慮した地域づくり、(3)次世代のリーダー育成、(4)啓発と教育活動があります。この目標は、(a)学び、(b)応援、(c)提言の3つの方法により取り組む計画です。以上のことから、4×3=12種類の自主事業を想定し、ここに寄付金を活かす予定です。もちろんこの自主事業を基に、新たな補助金事業への発展も考えております。

補助金事業は競争者が多く、採択されるとは限りません。一方、被災地はじめ本県では「待たなしの環境ニーズ」が今後も発生することが考えられます。この時の有力な手法が、認定NPOの資金による事業です。寄付をしていただく方々にはまた、この資金の使途や管理体制を示すことが必要でした。そこで構築したのが、前回紹介した「ステークホルダー、プロジェクト、マネジメント、ガバナンス」の4階層に基づく運営体制です。この運営体制により、責任をもって寄付者の皆様からの思いを、環ぱい独自の自主事業として推進していくことを考えておりました。

以上が認定NPO申請に至る経緯、また10年後の発展の提案でした。ご理解とご支援を、よろしくお願いいたします。(佐藤清)

アイーナ夜学で検討してきた「システム」のお話し

1. 「システム」の勉強に至る経緯

アイーナ夜学(夜学)は、「環境にやさしい未来の暮らし方」を提案する目的で開始しました。その活動事例は前回のニュースレターで紹介しましたが、暮らし方の提案は、どう行うのでしょうか。まず、「環境にやさしい」といえば、森林保全、断熱住宅、衣服再利用等の資源回収、マイはし等々の個別対応が考えられます。環境にやさしい暮らし方では、この個別対応をどの程度実施すればよいのでしょうか。例えば、「完璧なゼロエミッション住宅に住んでいる」と、個別対策が完璧でも、排気量の多い車を長時間運転する等、バランスの悪い暮らし方も考えられます。このため全体的な暮らし方の提案では、個別の環境課題の対応だけでは難しいと判断しました¹⁾。このため視点を変え、今回紹介する「システムの考え方」を検討することにしたのです。

2. 「システム」とは何か

夜学では環境活動で扱うシステムには2つのパターンがあると考えます。ひとつは図1の「機能的なシステム」です²⁾。注目する要素M1,M2等の構成と連結、内部状態を示すパターンです。こちらのシステムは成長の限界のWorld3モデル、経済関係、また人工物の設計等で見られます。もうひとつは図2の要素E11やE21などの要素の内包関係を示す「存在論(Ontology)的なシステム」です^{3),4),5)}。この図は、生態系や生物、複雑大規模な人工物の設計現場で見られます。図1と図2のシステムは、どちらも外部とはInput、Outputでつながり、物質や情報、エネルギー等のやりとりをしています。なお図1、図2のシステムは相互に無関係なものではありません。図1の要素の中に図2のシステムがあり、図2の要素の中にも図1のシステムがあるのです。要素は相互に、密接かつ複雑な関係をもっています⁶⁾。夜学ではこの2つのパターンの発想で、環境問題だけでなく、社会構造、人工物などを類型化し、検討してきました。その結果、未来の暮らし方の提案には、「システムの視点」が重要であると考えてきました。

3. 個別のモノやコトが習慣的に存在している理由

抽象的になりましたので、図1と図2の身近な例を考えてみます。図3のような小学校教室に、児童の座る「椅子」があったとします。学校の椅子はなぜ、この形なのでしょう。これを、図1と図2の視点で考えてみます。椅子なので座板や背もたれ、頑強な脚があります。椅子部品そのものは図1の機能的なシステムの形で考えることができます。一方、図2の存在論的な視点では図4に示すように、その椅子であると、限られた面積の教室に人数分配置でき、掃除で児童が持ち運びや積み重ねができ、木材とのふれあい、さらに上の軸の授業や清掃作業等に至るまで、教育の目的が叶うのです。このつながり(選定理由)が、図4で示すように全部の要素間につながる時、図3の椅子形状が決まり、教室での使用が習慣化し、永い期間、使われていくのです⁷⁾。

暮らし方の提案も、図4の教室用具の選定作業に似ています。森林保全、断熱住宅、自然エネルギー導入等々の個別対策は、教室の椅子や机、黒板の選択や配置作業に似ています。黒板や椅子のモノの形や配置が定まれば、それで期待できる教育内容や質が大体見当がつくのと同様に、図5の暮らしの中の階層で、習慣的に使われる代表的なモノやコトを検討すれば、環境負荷が推定できると考えたのです。

4. 「地球1個分の暮らし」の提案へ

エコロジカル・フットプリント(EF)は、図5のイメージで環境を検討するために便利な手法です。各階層で習慣的に使うモノやコトを選択し、環境負荷の推定ができます(コンポネント法によるEFと呼ぶ⁸⁾)。これとは逆の発想で、未来の暮らしの中で習慣的に使うべき要素の提案を行うことも可能です。例えば「9時に寝ましょう」のコトの習慣化がもたらす環境負荷を想像してみてください⁹⁾。このコトの要素が習慣化されることは、子供だけでなくその上下要素のつながりから、家族全員がそうなるって実現するのです。夜学ではその視点による改善目標を、EFのめざす「地球1個分の生活」にしたいと考えました。なお現実的な提案では、少子化に伴うコンパクトシティなどの再都市化、エネルギー地産地消、地域内循環経済(里山資本主義)等の提案活動と連動する必要があります。以上が夜学で取り組む「未来の暮らし方」の構想の方法です。(佐藤清)

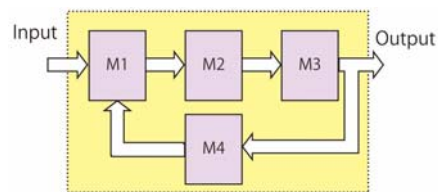


図1 機能的なシステムの例

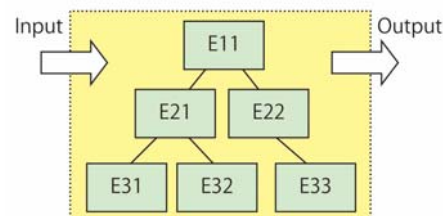


図2 存在論的なシステムの例



図3 教室で使う椅子はなぜその形？



図4 システム視点での椅子の選定理由



図5 暮らしの中にある様々なシステム階層

参考文献

- 1) 伊東編、環境倫理と環境教育、講座文明と環境14、朝倉書店
- 2) 松田正一、システムの話、日本経済新聞社、他
- 3) M.D.Mesarovic 他、階層システム論、共立出版
- 4) L.V.ベルタランフィ、一般システム理論、みすず書房
- 5) E.ヤンツ、自己組織化する宇宙、工作舎
- 6) H.A.サイモン、システムの科学、パーソナルメディア
- 7) 佐藤、かまいた環境ネットワーク環境学習講座(H22.9)
- 8) M.ワケナゲル、和田訳、エコロジカルフットプリント、合同出版
- 9) 佐藤他、エコロジカル・フットプリントを用いた環境教材「ハカローくん」、日本エネルギー環境教育第7回全国大会(H24.8)

◆ アイーナ夜学は、毎月第3木曜日、環境学習センターで、19時から21時まで開催しています。

マネジメント&ガバナンス委員会便り

マネジメント&ガバナンス委員会だより

平成26年5月に仮認定NPO団体の承認を受け、平成26年度から新たに寄付金募集の活動に踏み出すことになりました。マネジメント&ガバナンス委員会はさっそく、10年後の環パいのあるべき姿や、寄付金受入と活動への活用の構図及びこの一連の流れに対する取扱い要綱について作業を開始しています。

図1に、その概要を示します。現在、環パいでは、「市民提案プロジェクト」と呼ぶ事業、また将来発生する事業、さらに会議・雇用管理・広報等の管理活動に加え、環境学習交流センター等の受託事業業務を行っています。この中の市民提案プロジェクト（新規提案含む）と管理活動に関して、寄付金を募集するとし、その寄付金による事業推進により、県民のための受託事業も拡充していく姿を想定しました。

環パいは今後10年、これまでの多様な事業を背景に認定NPOとして広く寄付を募り、実績を積み重ね、県民に信頼されるNPO団体として発展していくことを検討しています。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。（佐藤清）

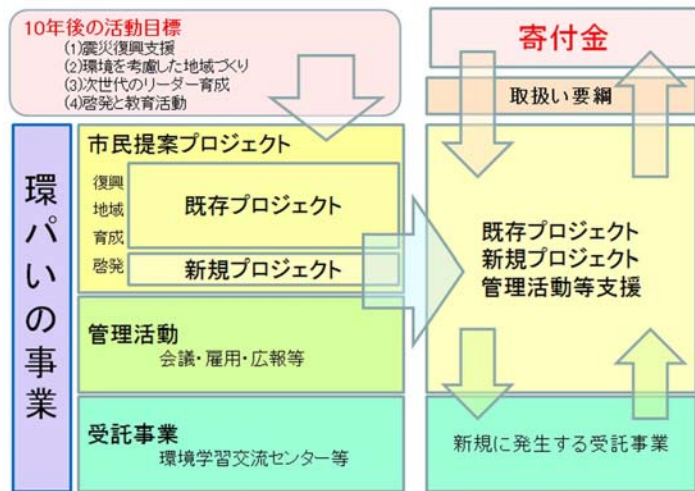


図1 環パいの事業と寄付金活用の関係

環境パートナーシップいわてのイベント予定・ご参集をお願いします

■ 通常総会の講演会のご案内

講演者 (株)環境システム研究所 代表取締役 原田 鎮郎 氏

題目 「愛・地球博から岩手の未来へ ～総合環境力による共生まちづくり～」

内容 自然の叡智をテーマとした「愛・地球博」の成功は、グローバルループと言うバリエーションの「木道」によってもたらされました。会期終了後は残さず撤去し元の自然に戻したことで世界を驚嘆させました。この木道設計及びチーフプロデューサーとして指揮したのが、原田鎮郎氏です。環境に配慮した構築物について多くの提案と実績をもち、震災後の被災地には、度々訪れ際立った提案をされています。岩手の復興に、氏の理念ともいえる「総合環境力」によるまちづくりについてお話しします。

日程 平成26年6月22日(日)午後1時より第11回通常総会 総会記念公開講演会は15:00～17:00

会場: サンセール盛岡(盛岡市志家町1-10 019-651-3322)

講演終了後、交流会を開催します。参加会費 4000円

■ 再生可能エネルギーフォーラム 2014 in 盛岡

講演者 スイス近自然学研究所 代表 山脇 正俊 氏

題目 「次代を担う子どもたちが豊かに生きるために・・・自然・環境・三陸復興・共生地域づくりにむけて」

内容 今回のフォーラムでは、持続的な復興のために心を寄せる多くのパートナーと共に、私たちがどのようなエネルギーを選択できるか、それがどういう社会を選択することになるかを確認し、エネルギーの自立に向けた「行政、市民、NPOの協働」による戦略を練る場とすることを目指しています。

日程 平成26年7月12日(土) 13:30～15:10

会場: サンセール盛岡(盛岡市志家町1-10 019-651-3322)

フォーラム終了後、交流会を開催します。参加会費4000円

環境パートナーシップいわてでは、認定NPOに向けて新しい運営体制づくりに取り組んでいます。皆様のご支援をお願いします。

特定非営利活動法人 環境パートナーシップいわて マネジメント&ガバナンス委員会

連絡先 〒020-0045 岩手県盛岡市駅西通1丁目7-1

いわて県民情報交流センター(アイーナ)5階 環境学習交流センター内 電話:019-606-1752 FAX:019-606-1753

〒020-0124 岩手県盛岡市厨川5丁目8-6 電話:019-681-1904 FAX:019-681-1906

Email: kanpai@utopia.ocn.ne.jp